

# 大学教育と地域交流について

別府大学短期大学部経営情報文化科

梶原 博

## はじめに

大学にとって、地域との交流は、その研究・教育の両面において、今もっとも重要な課題になっている。別府大学・別府大学短期大学部では、公開講座や地域社会研究センターの設立など、地域交流に対して積極的な取り組みをしてきたが、平成13年度に改組・新設された短期大学部経営情報文化科は、この課題に答えることをその目的の一つにしている。

ここでは、この経営情報文化科の観光コースを中心とした試みを主にとりあげながら、大学と地域の関わり方について考えてみたい。

### 1-1 経営情報文化科と地域交流

最初に、経営情報文化科について、簡単な紹介をさせてもらいたい。

本科は、従来短期大学部にあった商経科と生活文化科がいっしょになって成立した学科だ。短期大学のあり方として、最近では、これまで以上に実務志向であることが重視されるようになってきているが、その一方で、福祉や環境問題など、実務に必要な技能や知識にこれまで以上の社会性や個性の発揮が求められるようになってきた。そうした流れの中、商経科のもつ実務志向と、生活文化科のもつ生活志向の、これまで別々に扱われていた二つの方向性を融合させた教育の必要性が求められるようになってきたことが、改組の大きなきっかけである。

企業実務知識と生活技術を有機的に結びつけながら、具体的に教育の中に取り込んでいくにあたって、こうした知識や技能をいかに実践的な教育の中で学んでいくかが大きなポイントになる。私たちは、そのため、新しい学科構成の中に、従来の企業実務志向を反映したビジネス情報コース

と、生活技術志向を反映押した生活福祉コースに加え、新たに観光コースを設けることで、地域の中での教育を組織的に実践しようとしている。

### 1-2 従来の大学と地域交流のパターン

#### A 地域への研究の還元

地域との交流が大学の大きな課題であるということは、最近、次々と各地で産学協同研究センターが設立されていることから明らかだが、その内実というとなかなか難しいものがある。というのは、交流によるメリットの享受という面で、どちらかと一方通行的なパターンになりがちだったからだ。

まず、地域が得るメリットをあげるならば、様々な地域計画の策定などにおいて、大学のスタッフを有識者として迎えるケースが一番多いが、率直に言って、計画の「箔をつける」以外の意味をもたないことがしばしばだ。これは、地域の側にも問題があるが、何より、大学の人間にとって地域に関わることが、自分の研究業績にプラスになること以上のメリットを感じない点が一番の理由がある。別の言い方をすると、たとえ何らかの地域研究がテーマとなっている大学人であっても、それはあくまで研究の立場からの興味であって、地域と関わることと自体を楽しんだり、地域と積極的に関与しようと思っっているわけでは必ずしもない。

地域計画に関する様々な調査の依頼は、地域に直接還元されるわけが、上述したような事情のもとでは、よほどその調査内容が研究と重なっていない限り、大学側の腰はどうしても重くなりがちだ。

また、最近の地域研究センターの基本的な目的は、研究成果を地域に生かすということなのだが、しばしば見当はずれな「貢献」になってしまいがちなのも問題だ。例えば、ある協同研究の成果と

して、地域の特産品である「下駄」を水流カッターで製造するという事例がある。大学が地域に「入って」それぞれの地域性を真剣に考えるならば、このような「成果」はおよそ出てきそうにないと思うのだが、現実には、このような形式的な研究の「還元」が多々行われている。

## B 教育と地域交流

このように、研究の還元を通じた大学と地域との交流は、まだまだ始まったばかりで、その方法や研究のあり方など、考えていかないといけない課題を数多く抱えている。

こうした現状にあって、大学が行っている活動のうち、研究とならぶもう一つの柱である教育の場面では、相互にメリットが共有できることが見込まれる。

というのは、地域の活性化の鍵として、企業誘致に代表されるような直接的な利潤以上に、人間の交流によって生まれる活力が重要視されるようになってくると、学生という若年者の集団を抱える大学は、地域にとって魅力的な存在だからだ。

一方、大学にとっても、学生の「やる気」をいかに鼓舞するかが最大の課題となっている今、地域社会での教育は一種のカンフル剤として期待される。

そこでまず、このような教育を通じた大学・地域間交流の具体的な事例を取り上げてみたい。

## II 経営情報文化科(観光コース)での活動

### 2-1 これまでの活動紹介

私たち別府大学で行われてきた大学・地域間交流としては、地域研究センターが中心と推進・調整するものと、学科教育の一環として行われるものとに大別できよう。

大分キャンパスにある短期大学部経営情報文化科で行われてきた、教育目的としての交流活動としては、

- ・商経科および商経専攻科による各種地域研究(平成3年以降)
- ・生活文化科による地域研修活動(平成11年以降)
- ・挾間町との交流協定(平成12年締結)を背景とした、各種フィールド教育

・大分キャンパス観光研究会による地域研究などがあるが、これらの企画の最近のものも多く、学科の枠にとらわれずに、地域社会研究センターの活動と密接な関わりをもち、学科の枠にとられない性質のものであることは付言しておきたい。

なお、商経科および生活文化科は、改組により今年度(平成13年度)から経営情報文化科としてまとめられている。

商経科による地域研究は、文献・資料だけではなく、学生が実際に地域を歩くことから始めるという以外は、ごく一般的なものだ。

また、生活文化科による地域研修活動は、例えば日田の観光地区の町歩きや陶芸教室の受講など、内容自体はこれもまた一般的なものだ、こうした試みを学科の「売り」に位置付けようとする意識が若干なりともあったところに特徴がある。

挾間町との交流は、授業を通じて福祉施設や町役場、議会などの見学する、町のホームページ制作に協力する、など多岐にわたっており、今後大分キャンパスの教育プログラムに大きな影響を与えることになろう。

最後の観光研究会による地域研究は、本学の小堀講師を中心とする研究会グループにより昨年度より始められたものだ。

考え方の違いはあるものの、大分キャンパス2科(商経科・生活文化科)において、当初より地域交流が教育カリキュラムの中で一定の意義もっていたこと、そのことを背景として、大分キャンパスに観光に関するある程度整備された教育カリキュラムが導入され、本格的な地域交流プログラムが開始されたことが、現在の経営情報文化科への改組と大きく関係していることに注目すべきであろう。

### 2-2 地域観光マップの制作

最近、学内・学外から次第に注目されるようになった地域観光マップの制作は、こうしたこれまでの活動の延長線上にあると言える。本稿では、この企画を紹介しながら、地域と大学の交流について考えてみたい。

#### A 活動の流れ

地域観光マップの作成は、観光コースを担当し

ている本学小堀講師（短期大学部・経営情報文化科所属）の指導により昨年度より始められた。昨年の日田豆田・隈地区に続いて、今夏、別府鉄輪温泉のマップも作られ、さらに別の地域からの依頼もあるという話だそうである。

まだ試行錯誤の段階ではあるが、現在のところ次のような作業過程で制作は行われている。



- 1) 授業（観光野外実習など）や研究会に属する一定数の学生が最低でも2回、当該地域へでかけて、地域住民と親密な交流を行いながら、現地の情報集を行う。
- 2) 現地調査に基づいて、調査結果をコンピュータグラフィックによる自作地図にまとめる。
- 3) 完成物である地図に基づいて、地域の関係者といっしょに発表会を行い、意見交流を行う。昨年の日田地区の場合には、発表会でのプレゼンテーション資料もコンピュータのプレゼンテーションソフトで作成しており、これも調査の完成物と言える。
- 4) 意見交換を制作物にフィードバックする。  
この各ステップについて、補足しよう。

## B 日常的な地域交流

現地調査には、授業や研修旅行などによる正規の学内行事によるものもあるが、これだけでは十分な時間がかけられないことも多い。そこで、観光研究会という学生研究会によって調査を補います。なお、経営情報文化科の観光ビジネスコースは、この研究会活動を制度化したものと言えよう。

調査といっても、自分たちが楽しむ姿勢を重視しているので、調査の回数も負担にはならず、日常的と言ってもよい交流の中で、地域住民と学生との間には通り一遍では得ることの難しい親密な関係が生まれる。この点にまず、私たちのプログ

ラムの大きな特徴がある。

観光地とは観光資源を訪問者に売る産業と言えるわけなのだが、単なる資源の切り売りではなく、その地域の自然や歴史を素材として地域住民が手を入れた、一種の生産物でもある。ただ、普通の生産物と違って、町をきれいにしたり、建物を作り変えたり、訪問者をもてなしたりという、日々の日常生活がそのまま「生産活動」になる点が他の産業と異なる。したがって、生産過程＝日々の暮らしが観光という商品と一体化されて訪問者に表現され、訪問者も、目に見える観光資源だけでなく、そうした地域住民の生活の匂いみたいなものを、観光の対象とするようになりつつあるのが、最近の観光の特徴だろう。

そうした観光業における「生産」過程の部分は、ともすれば見落とされがちになるから、私たちは、学生を何度も観光地に足を運ばせ、会話を積み重ねさせることで、その地域の観光活動全体を感じてもらおうことを狙っている。

## C 成果物という発想

調査結果は、一次的には一般的な文字（プラス図表）レベルでのレポートとしてまずまとめられる。地元の人たちが一目で内容を見ることのできる成果物にすることがポイントだ。観光地図は、単に自分たちにとっての勉強の成果であるだけでなく、地域に対する成果物なのだ。成果物はモノだけではなく、地域での完成発表会も含まれている。昨年の日田の場合では、プレゼンテーションソフトを使った学生による発表が行われている。

成果物を地域に提示すれば、当然それに対する反応が返ってくる。むしろ、私たちの考える地域交流はこの段階から始まる。一過性ではなく持続性のある交流にすることが、大学と地域の交流に対する私たちの基本的なスタンスである。これについては、枚数が許せば、最後に触れてみたい。

## D 地域交流型の教育プログラムの特徴

「成果物」を重んじるということは、教育課程が同時に地域への提案であるということだ。学生にとって「地域に提案する」ということになると、肩に力が入ったり、逆に臆したりするものだが、日常的な交流が背景にあるおかげで、言うほうも聞くほうもリラックスできる。といつつ、やは

りそれなりの緊張感もあるわけで、この緊張感は学生教育という点で大きなメリットとなる。

また、成果物として地域に提案されたアイデアは、発表会によって必ず何らかのフィードバックが行われる。

学校の「中」で行われる授業は、どうしても、単なる知識の伝達もしくは詰め込み作業中心となりがちで、「実践的」な知識を伝える授業であっても、授業そのものが「実践的」という具合にはなかなかないかない。というより、何がどう実践的なのかは、第一に皮膚感覚に属し、移り変わりの激しい時代の中で、教師がその皮膚感覚を学生に伝えるのは、ますます困難になりつつある。したがって、もともと受け身になりがちな授業が、ますます自己目的化してしまう。

これに対して、地域での発表会は、自分たちのアイデアが、そのまま、それを必要としている人々によって評価される点で、きわめて「実践的」である。実践的教育というとき、地域という教育フィールドをはずしたならば、それは単なる掛け声倒れになってしまうであろう。



観光マップ全体図

日本が誇る  
徳川七郎景観  
別府八幡鉄輪温泉  
別府大学短期大学部  
観光研究会作成

### III 観光マップ作りで見られる 地域交流型教育と今後の展望

#### 3-1 地域は私たちに何を与えてくれるのか

観光マップ制作を、このように交流型教育プログラムがいかに地域から得るものが多いかを教えてくれる。では、地域の方はこうしたプログラムによってどのようなメリットを享受できるのか。前述したように、持続的な交流でありたいと願うのなら、地域のメリットについても十分な考慮が不可欠である。

##### A 地域にとってのメリット

今回の鉄輪地区観光マップの作成と、それに伴う様々な教育活動が地域に与えるメリットとしては、ただちに次のような点が挙げられる。

- ・観光マップを安価に作成、更新できる
- ・参加した学生を通じて直接的・間接的な宣伝効果が見込まれる
- ・地元イベントへの学生動員に関する今後の期待

このように、交流型の教育プログラムは、地域にとっても、有形・無形、短期・長期のメリットを見出せることは容易に想像できる。

ただ、こうした地域が受け取る、あるいは受け取ることを期待しているメリットは、様々な問題をはらんでいるのが現状であり、その点を少し考えてみたい。

#### 3-2 短期メリットへのしがらみ・弊害

##### A 観光マップと短期メリット

観光マップを作って、地元で発表会を行うと、まず、単純な誤りの指摘から始まり、されに、「あれを書き込んでくれ、これを追加してくれ」という希望も寄せられる。昨年の日田地区でもそうだったが、鉄輪の場合は、完成物が地図だけだったためか「交番がない」とか「CDコーナーを入れたら」とか、日田の時以上に、細かい注文が出された。

注文が出されるのは当然である。私たちは鉄輪の町に関わることで、これまで説明してきたような「一般的な」教育上のメリットを享受するわけで、成果物としての観光マップは、このメリット

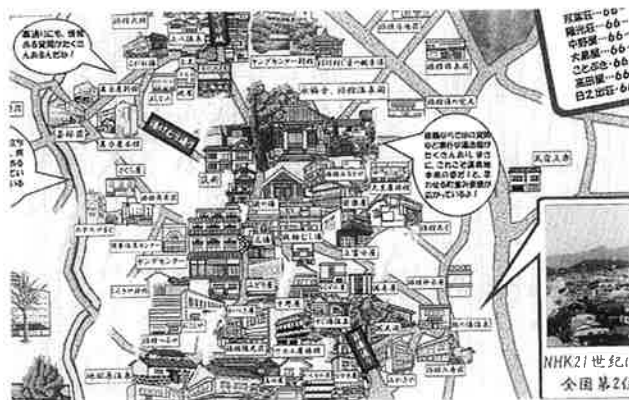
に対する一種の「代価」でもあるからだ。観光マップが代価であり得るためには、観光マップが観光マップとしてそれなりに「役に立」たなければならぬから、そのための地元の意見・注文は貴重なものである。

そのことを承知した上で、もう少し、地域のメリットについて考えてみよう。

### 3-3 町のデザインの共同制作

観光マップの制作責任者である小堀講師は、どの完成発表会でも、会の冒頭、自分たちのデザイン上の特徴を次のように説明している。

- (1) 道路やランドマークの位置関係について、デザイン上のデフォルメを行っていないこと。
- (2) ランドマークは、実際の写真から起こした細密なミニチュアによって表現されていること。



観光マップ拡大図

これは、従来の観光マップの類が、一見した見易さやデザイン上の要請にしたがって、位置関係や距離感が実際と異なることが多いことを踏まえたもので、上記の2つのポイントが相まって、自分たちの作ったマップが文字通り「見たまま」のものであることに特徴があることを強調しているのだ。(上図参照)

細密であることは、情報量の問題であるとともに、同時にデザイン上の主張でもある。そのことは、一見写真かと思ふばかり建物への書き込みだけでなく、実際のままだという湯煙の位置をみても明らかだ。

ところが、鉄輪で行われた発表会の席上で、この点に関する質問や意見はまったくといっていいほど出なかった。ここに一つの問題がある。

#### A 大学が提供できるもの

小堀講師の提案は、とりあえずは地図のデザイン上の原則に関わるものだが、同時に、鉄輪の町に対する見方に関わってくる。細密に書き込むといのは、地域性とは一見関係なさそうな話であるが、細密な描写が逆に、鉄輪の俯瞰図となって、作り手や受け手の想像力をかき立てる原動力となるのではないか。とするなら、そこに込められた町のイメージは、とりわけ、複数の同じ手法で描かれた地図をならべたときに、くっきりと浮き彫りにされよう。

一見ごちゃごちゃした俯瞰図から読み取れるもの、読み取れないものについて、みんなが語る、言い換えれば、自分たちの町をどう見ているのか、地域の人たち自身の眼で発言があれば、私たち地図の作り手は、地域の人々の語るまなざしで、もう一度もう一度町を歩き直さなければならなくなるだろう。しかし、単なる間違い直しではそのような再挑戦につながらない。

小堀講師の今回の手法は、繰り返しになるが、地域性とは直接関係のない、いわば研究の場から生まれたものであろう。そうした研究上の手法が地域の個性を浮き彫りにすることに成功している、あるいはつながっているとすれば、まさに、大学という研究機関ならではの地域への貢献である。私たちは、こうした研究のあり方をもっと深めなければならないのと同時に、地域もこうした大学ならではの使い勝手と、そこからしか生まれないメリットについて知る必要がある。

新しい研究のあり方を追求することと、地域が大学というところについて深く理解することは、同時並行的なものであるとともに、一朝一夕にはとてもできることではない。ここでも持続性が重要な課題になってくる。

#### B 共同作業としての町のデザイン

同じ職場の同僚として、半ば興味本位で今回の企画についてまわった筆者が、町を歩いた後で、様々な学生の書き込みのある完成した地図を見てみると、

- ・豊富な温泉資源を象徴する、何本もの湯煙
- ・やまなみハイウェイという大通りに面した大型ホテル・旅館と、昔ながらの狭い坂道に密集する旅館街との分化

・さらに、「地獄\*」や「ヤングセンター」、湯治場旅館という、別々に取り上げてもおかしくないような多様なアイテム

が目に飛び込んできて、それらが渾然一体となって鉄輪温泉の特殊性を印象付ける。

\* 「地獄」とは、血の池地獄や海地獄など、色や形、付帯施設にそれぞれ特徴をもつ同一経営系列下の観光施設であり、鉄輪を中心に八つの「地獄」があります。また、「ヤングセンター」は、旅芸人のやってくる劇場施設。

果たして、地元の住民にとって、こうした光景はどのように目に映っているのだろうか。あるいは、発表会の時に語られていた「正しい温泉の楽しみ方」の「正しい」とはどういう意味なのか。それは具体的に、温泉や旅館のどのようなどころに見ることができるのか。

今回の発表会では、そうしたことに踏み込んで語り合う時間も雰囲気も準備できなかったが、学生と作った地図が、そういう語り合いの出発点となり、ひいては町の活性化に役立つことが観光マップ作りという企画によって地域へ提供できるメリットだと私は考えている。

交番を書き込むかどうかは、町の特徴をどうつかみ、どう地図に取り入れるかという議論の次にくるものであって、私たちがそこまで関わるかどうかは、また別の話だ。

ちなみに、平成12年に結ばれた挾間町との交流協定は、町づくりと大学の教育・研究活動を全面的に結びつける、まさに持続的な交流を目的としています。この協定に基づき、町の整備計画のほとんどに本学教官は加わっており、町のホームページ制作にも全面的に関与している。一方、大分キャンパスでは、議会や福祉施設の見学など、地域教育のかなり部分で挾間町の協力を得ている。さらに、両者の共同事業としては、IT講習会が現在複数開催中である。注意してもらいたいのは、これらは企画が単発的でなく、日ごろの交流に裏付けられた、新しい大学作り、あるいは町づくりのランドデザインの一環として、両者が協力し合いながら進められているということだ。

## IV 終わりに

現在進められている観光マップ制作を取り上げ

ながら、大学と地域の交流について考えてみて感じるのは、交流による大学側のメリットはかなりはっきりしているのに対して、地域の側にとってのメリットについては、十分な検討が必要だということだ。

観光マップが「成果物」として重要だというとき、大学教育にとっての視点がまずそこにある。一方、極論すれば、このマップは地域にとっての成果物には、そのままでは決してならない。これを本当に地域にとっての成果物とするには、地域の人々の中で、自分たちと大学の双方に対するそれなりの理解が必要とされる。そのことを抜きにして短期的なメリットにこだわると、互いに失うものがあまりに大きい。大学が提供できるメリットは、最後はやはり、ものの見方・考え方でしかない。

ある地域の地域らしさとは何かを考える場合、歴史や自然、人情、習慣、景観など、数多くの要因が複雑に絡み合っている。ましてや、今行われている地域おこしの作業は、これまで当たり前のよう考えられてきた地域性、あるいは伝統や文化という地域の枠組みが、どうもうまく機能しなくなってきたということを出発点にしているのだから、これまでとは違った目で自分の地域について考えるなくてはどうしようもない。この点で、大学という研究者と学生の二人三脚の組織は、大学の危機が叫ばれている今でもなお、新しい視点の提供者として大きな力をもっていると私は思っている。

一方、大学が提供できる新しい視点といっても、現状では、ほとんどまだ何もない。なぜなら、研究という作業において最も基本的な手法である「一般化」(あるいは抽象化)から得られるものは、地域社会というキーワードと結びついた場合、そのままでは「どこにでも当てはまる、したがって、目の前の現実の地域にはまったく意味のない」ものでしかない。そのことに気づかない、あるいは目を塞いできたことが、現在の大学の危機を産み出したことを考えると、地域との交流は大学の存続そのものに関わる問題であるが、残念ながら、「大学が提供できる新しい視点」について考えるのは、別の機会に譲りたいと思う。